

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和3(2021)年
5月号
通巻609号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和3年5月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



桜のトンネル (弘前公園にて)

青森県弘前市 石田勝利さん撮影

昭和42(1967)年5月23日 月次祭法話より

天地自然の心から遠ざかっている人類

法主 矢追日聖 (満55歳)

月次祭には霊界人も参画

しばらくお天気が続いて、今日も滴るような緑の清々しい日になっております。

五月というのは毎年このような気候でございませうが、こういう季節の移り変わりと共に、我々人間の肉体や精神というものも、自然の動きの中に何かの変化がきておるはずなんです。自然の力を意識しておつてもおらなくても、付いていく意思がなくても付いていかされておるのが現実なんです。

今日まで二十年余り、月次祭の時にはこうして皆様の前に立ちまして話をしておりますが、言わんとするところはたった一つなんです。昔から真理は一つだと言いますが、いつも同じことをしゃべっておるんです。自分で自分が可笑しくなる場合もある。

けれども二十年間の過去を振り返って見た時に、案外、これは効果がないという事も分かってるんです。真面目に聞いてはもらっているんですが、これを日常生活とか、その人なりの人間性や魂の中に、あるいは血肉の中に、どれだけ消化しておるか考えた時に、さほど効果がないものだという感じがよくするんです。

今年のお正月にも、毎月の法話なんか止した方がいいやろうという話をしておったんですね。けれどもわずかな例だとしても、自分の内部にうごめいていたよ

うな何かが、法話が迎え水のようになつて、さつと出てくる。それで自分で悟れるというような方もあるはずなんです。

それと同時に、霊界人が大倭のこうしたお祭には必ず参画してくれておるんです。今、目に見える現界人はわずかですが、これの何百倍、何千倍という霊界人、つまり肉体を持っていない人間達です。特にあなた達と縁故関係のある人達やと思うんですが、参画してくれておる。

私にはそういう半面がありますので、つまらないなというような気持ちがあつても、まあ厚かましく皆さんの前に立つておるんですが、人間として考えた時には、「私は先生でございませう、皆さん、私の言うことを聞きなさい」というような形でしょ。こそばうなる時があるんです。

私の性格から言いますと、指導する者と指導される者というような相対の形において物を言うのは、あまり好まないんです。私の人間性はそうであるのに、こうしてマイクの前に立っているのを外部から見れば、誰もがあれは偉い先生やなということになりませう。学校で言えば先生と生徒のような雰囲気を作つてゐるわけです。

自分のものを掴んでほしい

聞いている人は、緊張したわずかな時間の間に何か自分のプラスにしようと、理解しよう理解しようとしておられることはよく分かるんですよ。

そこでね、私の言うこと以上に、自分の中に持ったものを自分で出しながら、心の中でしょっちゅう動いてほしい。自分のことを忘れて一方的に話を聞こう聞こうという気持ちだけでは、単なる知識の世界、観念の世界にとどまるんであつて自分のためにはならんと思うねん。

だから私が醤油であれば、あなた方は水を混ぜて、自分としていい味を出してほしい。話す方、聞く方という相対が一体となつて、そこに自分のものが掴めると思うんです。

お醤油と水をミックスするような気持ちで聞いてくれているのは、霊界人の全てがそうなんです。何万という霊界人が、過去において自分の生きていた時の人生を反省して、過去の罪を自分でできるだけ消滅していこうと、向上していくために今日のものすごいチャンスになつております。

それは、霊界人がいくら自分の罪を消して向上しようと思つても、霊界人だけではできないからなんです。現界から流すものがあつて、それを霊界が受ける。また霊界から流れてきたものを現界人が受けるというように、双方が一つにならないければならない。相対が一体となつて、お互い両方の向上があるんです。

毎月二十三日が大倭においてのお祭ということ、霊界人全部が知つてゐるはずなんです。

加美の心に近づく実行力を

大和言葉は、一つの言葉にいろいろな意味が含まれております。祭りも元は誰かを待つとかいう、そんなところから起こつてゐるらしい。現界人というだけじゃなく霊界人も共に、みんなお互いに待ち合^あうて一つの場所が集まつて祭りをする。

「まつ」は「まつり」に通じていくし、祭りということは「まつろう」(順う)になつて、理屈抜きで無条件に付いていくという大和言葉なんです。

我々が何にまつろうていくかと言へば、この天地自然の動きです。人類も含め宇宙全てを創つてきた根元の力、いわゆる加美さまなんです。それには無条件で付いていかなければならない。

暑いから冬にしてくれとどんなに手を合わせて大祈禱しても護摩を焚いても、時間が経たなければ冬にはならないんです。めつたに我々の意思通りにはなりません。宇宙の働きには抵抗したつて何にもならない。暑くなれば薄着をすとか、また病氣も流行るから食べ物に気を付けるとか、そういう行き方がまつろうという精神なんです。まつろうことが祭り事になるんですが、実際、具体的に神さんの心の通りに動いていくことで、家庭の中であれば家風と言いますかね。それが大勢の人の問題になると、今度は「まつりごと」、即ち政治になるんです。

「まつ」「まつり」「まつろう」「まつりごと」は大和言葉で、語源が一つなんです。

今日の月次祭に一堂に集まつておるといふことも、現界人も霊界人も皆、自然の心、言い換えると加美さまの心というものをお互いに語り合^あうて知つていき、知つた以上はその心に従つた実行力がなければいけない、そのための行事です。行^なうということが祭り事なんです。加美の心を知つたところで、なかなか実行はむづかしいんです。それを加美の心に近づくような日々の行動を取つていく意味においての祭り事が月次祭というもので、日本の古来から伝統的に伝わつてきてゐるんです。

私が話して、あなた達が一方的に聞くだけでは何にもならない。

大宇宙の心から遠ざかる人類

私が二十何年間、言わんとしてきた目的は、星とか太陽、地球とか全てのものを最初に生み出した根元の大宇宙、天地自然の心と、我々現在の人間の心が、一つになるということなんです。とこ

ろが人類が発生して以来、何万年という歴史を経て、地球上のあちらこちらに繁殖をしたことよって、何々民族、何々民族というようにいろいろ種類分けをしております。これは人間が便宜上分けられていることであって、本質的には同じなんで、全然区別はないんです。

初期の人類、いわゆる原始時代の人間は、自然の心を割合、素直に受けておったと思うんです。しかし何万年というような永年の過去において出来てきた、人間の心の遺伝というものがあります。だから、発生した当時から人類と、今の人間を比べれば、全てのことが変わっていると思うんです。

何千年、何万年と時代が下ってくるに従って、人類の歩み方や心が、親から子に、子から孫へとというように一代一代、十代、千代、万代と変化して、現代の人間が出来上がってきているんですから、今現在の我々の考え方は、根本の大自然の心と比べれば、およそとんでもないだけの開きがあるはずなんです。

我々の年代で見ても、終戦前と終戦後の子供達とは、社会事情とか親の心とかいろいろ異なる遺伝がありますから、精神内容が全然違ってきています。わずかに百年足らずの間でもそうなんですから、人類発生して以来の永い歴史の中にどれだけ変化しているか分からない。およそ加美の心、自然の心から遠ざかっておるはずなんです。

その遠ざかっている心を、もう一度、根元の心に戻そうじゃないか、また戻さなければ、我々が決して幸せになれない。天地自然の力の中に生まれて、その中に育てられておる人類が、天地自然に逆ろうて幸せになるはずがないんです。

ここに大倭で言う、神ながらの宗教があるんです。

大倭の宗教的修行とは

キリスト教と言えばイエス・キリスト、仏教と言えば釈尊がおります。しかし神ながらの宗教には、宗教という言葉を使っていますが、誰が開いたか教祖はありません。私も教祖ではないんです。大倭教という看板の主と言いますかね、いわば一軒の家の戸主というような程度の者です。

神ながらの天地自然の法則のようなものは、私が考え出したんでもなし創ったんでもなし、何億年もの昔から流れておるんです。そういう自然の心を、先祖伝来から私は私なりに捉えているだけのことです。私自身が受け取るものがあるし、まあ普通の人よりも、ちょっと一歩前進しているかもしれません。

それで大倭教の名のもとに、自分の感じのまま、体験したことを全て皆さま方にお話ししているんです。結論は、自然の心と人間の心が近寄るということ。一つになればなおさら良いのですが、これだけ何万年もの心の曲がった遺伝があれば、よなかなか自然と一体の素直な心にはなれない。だからたとえ一歩でも自然の心に近づこう、いわゆる加美さんに近づこうという努力をはらうのが、大倭の宗教的修行であるんです。こういう話は観念的には誰でもすぐ分かるでしょう。分かるけれども日常の生活の中に生かそうとした時に、

これがいかに難しいかということが、皆さんも経験上お分かりになると思います。

けれども、お互いにそんなことばかり言うだけでは、人類には永久に平和が来ないです。これだけでもつれて歪んで、自然の心と遠ざかった世界ですから、ここしばらく、まあ百年、二百年、三百年というような短期間には、自然の心に戻った平

和な人類が出来るはずがないんです。何万年の歴史がありますから、今日の歪みを短兵急に加美の心に引き戻して、世界人類が平和に光り輝くということは、我々の息のある間はおよそ考えられないと私は思う。

だけれども、今から根を下ろして努力していく、精進していくというところに、いつかは平和なものが出てくるということは予想できると思うんです。

今、人間が一番遠ざかっておるところの自然の心に、理屈や知識でなしに、自分の感じ方や感応によって触れるという人が案外少ないと思うんです。

ね。

古代人あるいは昔の人達は肌で感じたんです。

人間の利益だけ考える

万物一切のものを育て、皆幸せにいくようにと、大宇宙の心は動いておるんです。我々人間も自然から生かされている生命体で、その生命力を靈魂と言ってもよろしい。それは宇宙の心を即キヤッチして、肉体を守っておるはずなんです。

そういう宇宙自然の心を、人間は何万年の歴史の中で無視しているし、そんなものがあるかないか気がつかない者も多い。例えば、現代の若者が山に登った時に、山を征服したとかいう言葉を使うだけでも恐ろしい。天地自然を人類が犯そうというような、いわば生意気な、とんでもないことなんです。

科学の力で自然を征服していくこうとする気持ちがあると思います。原子爆弾で台風の目を砕いたら台風を食い止められないかとか考えておるかしらん。けれど、そうした自然に起こり得る現象に

対して、人間が知識によって抵抗した場合、その何倍かの災難とか被害が来るはずなんです。

自然そのものは人間を守ってくれているものなんです。そういう大乗的な、大きな慈愛を忘れて、部分的に人間の利益だけを考える方向にもっていけば、しまいには人類そのものが不幸になってきます。自然の心から遠ざかるに従って、反対の現象が出てくると思います。

大倭の場合は、自然の心にできるだけ近づいていくこと、即ち自分の心の中にある小宇宙ですね、それをいつでも自覚して開発していくようにお互いに努めること、これが修行なんです。

それはまた、経済事情も複雑な現代社会に生きておりますから、原始社会と事情が変わっております。その点は変わっていますが、人類の本質においては変わっておらんと思うんです。一万年前の人類でも現代の人間でも、女があり男があり、夫婦おとこになって子供をこしらえて親となり、飯を食わせて育てていくんです。

幸福感の問題

生活の様式や社会情勢が変わっておるといふことは言えるんですが、果たしてそれが野蠻であるか、進歩であるか退歩であるか分からないと思うんです。昔はランプで生活しておったのが、今は全部電化しております。井戸で水を汲んでおったのが水道になってるし、洗濯一つでも洗濯機を使う。なるほど生活が便利になっていることは事実なんです。

人間の知識の発展の恩恵だとは思いますが、文化文明の現代の生活における幸福感と、古代の人達が生活の中から受け取る幸せを比較した場合に、古代の方がよほど幸せだったと思う。

現代人のような気苦労とか悩み、迷いがそんなになかったんです。

人間の幸福とか不幸とかいう問題になってくると、生活様式だけでは言えない、個人個人の持っている心の内容にあるんです。

例えば、どこへ行くのか方向が分からないというような時、古代人なんかは合掌して、天地自然の宇宙の気と自分の心をつなげて交流をするんです。これを大和言葉で「かんがえる」と言います。加美に帰るといふことなんです。今、精神統一とか瞑想とか禱いのちとか言いますが、そうすれば自分の行く先が見えてくる。ずっと考える内に分かってくるんです。地図もいらなければ何もいらない。

そしてまた、ある人に自分の思いを馳せる場合に、その人を念じて天地自然と交流すれば、自分の心が天に行く。その心が反射してその人の心に行く。ちょうど高い所に何か浮かしておけば(※人工衛星のことか)、アメリカから来る電波をつかんで日本のテレビに送ってくるのと理屈が一緒なんです。自分の念が天に届き、そうすれば相手に届き、何かあったなと感じる。テレパシーというやつですね。

そういうように古代人は、自然の心と一つになっておったから靈的な感応があった。今みたいに電話はいらない。電気はいらない。学問もいらない。現代の文化生活以上の何不自由ない、心豊かな生活をしてんねん。

自分の食物でも衛生がどうだの栄養がどうだの言わなくていい。牛や犬だって、毒と薬は見分けて食べているんですからね。腰痛起こしたら自分の手が動いて勝手に直す。胃が下がって変だと言うなら、勝手に動いて上がってくる。医者もいらない。これは何も古代人だけやなしに現代人

でも出来るんだけれどね。

水が足らなければずっと念じておいたら、どここの山へ行ったら水があると分かってくるしね。今の人間の想像のつかない超文化的な生き方をしていたんです。

今は物質を通じた文化ですけど、その時代は精神的・靈的な文化が、日常生活の中に溶け込んでおった。だから、古代人の心と今の人間の心を私が見た場合には、古代の方がよほど自然に近かった。

今の人間が神さんに手を合わせたら、ちよっと賽銭を放り込んで言うことを聞けというように、我がの欲の塊をぶつけているんです。そういう横着な強欲信仰は、古代にはありませんでした。

自分を助けてもらおうという意味で、手を合わせるのではなく、自分の心と宇宙の心をつなげる、そして自分の方向を自分で定めていく。それが古代人の祈りであつたんです。

こんなことを、今の社会に言うたってあなた方は分からんかもしれませんが、幸いなことに私にはまあ分かるものがあるんです。だから大倭教というような、だらしのない看板を出して、皆さんの前で、先生面してしゃべらんねん。泣き泣き、いやでもしなきゃいけないのが、私の持つて生まれた運命的なもの、宿命なんです。

私が申し上げている体験を、あなた達も一応「そうかな」と素直に取り入れて、自分の心をごね回してほしい。それで、一人一人がみんな違うものを持っていてるんですから、まず自分で自分のことを知って、そして天地自然の心と一つになるように修行していく。そのような心境において大倭に集まってきてほしいと思います。

今日はこれで終わります。

じんずうりきによぜ
 「神通力如是」の真意をさぐる 第十三回 大倭教の源流にさかのぼって

今回の原文は、前回の昭和16年11月11日午前10時の神話の続きです。前回の最後にスサノオの命の出現が予告されていますが、今回は倭姫と奇稲田姫とのやりとりのあと、スサノオの力強い語りがはいります。

原文

「倭姫、ミニアママル才言葉アリガタク、拙ナキワザニテ日オオンマヘケガシマイラセシニ、今日ノコノ有難キオン言葉、倭姫、厚ク厚クオン禮申シアゲ奉リマス。拙ナキワザニテ候ヘドモ、吾ガ一心ニ妙法トナヘ神楽ソウシマイラセン。今シバシオ許シアレ」

「大倭、日高見国トビノモリ、我が日本ノ安泰ヲ、神トモニ妙法ヲ、唱ヘマス地デアルゾカシ。聖壽萬歳、萬萬歳、題目、、、。

アー有難タヤ、モツタイナヤ、吾レオン前ニ於テ、奇稲田姫命、御手ミズカラオ合セラレ、トモニ妙法トナヘラレテ候。ミナミナソノ心ニテオン題目トナヘ候ヘ」一拝礼拍手。

「拙ナキワザニテ候ヒシガ、ミ神楽唯

今オサメ候。アーモツタイナヤ、何トゾ御手ヲ下ゲサセラレ玉ヘ」

奇稲田姫命、「ワラハハ、奇稲田姫。

倭姫ナガナガ御苦勞デアツタ禮ヲ申シマスル。倭姫マタタノムゾヨ」

倭姫礼、「倭姫、拙ナキワザニ候ヒシガ、ギヨ意ニ入り奉リコノ上ナキ喜ビ、嬉シキ極ノアマリ申上ゲル言葉イデ申サズ、何トゾオ許シ下サレマセ。オイトマ

チヨウダイ仕ル」
 「吾ハ、^③建速素戔嗚^④」
 天津日本、^⑤国民ヨ、真ノ妙法トナヘ

クレ。今我が日本ハ閻、^④三類強敵セメヨセテ、我が日本ヲウバイトラム。ミナノ者、アンジルナカレ、我が日本ハ八百萬、諸天善神加護ノアル有難キ国ナリ。真ノ妙法トナヘ、吾ガ罪障フキトリ、トモニ世ニ出シクレン。吾レ生カヘ、^⑤惡魔ニオチ入りシ時モアル。題目供養ニヨリ、コノ罪障ヲヌグイトリクレイ。真ノ妙法トナヘルハ我が日本ノカタメゾカシ。ヨクヨクコノ旨タイセヨ。吾レトモニ唱ヘン真ノ題目、ナムミヤウホレンゲキヤウ」

註 釈

① 聖壽萬歳

聖壽 天子の年齢。天子の寿命。(岩波書店『広辞苑』による)

万歳 長い年月。よろずよ。

○天子様の齡がいつまでもつづきますよう。

② ギヨ意ニ入り

御意 (一) 相手を敬つてその考えや気持をいう語。お考え。おほしめし。みこころ。

(二) 主君や貴人などの仰せ。おさしず。

おことば。(小学館『日本国語大辞典』による)

○御心にかなう。

③ タケハヤスサノオノ

「スサノオ」を「ノオ」と伸ばすように発声する文字で原文は記されている。

このことについて、以前私も参加した瑞光院(法主宅)での座談会で法主様が言及されたことがあった。

その時の記録が雑誌『自然生活』(野草社)1993年第4集39頁に「約束された出会い」として次のように掲載されている。

《石垣 スサノオという名前、それからクシイナダヒメとは言わないで、クリシユ、クリシユ、ユ、ユと言つてましたね。
 成田 スサノオもスサノオとのびて……。
 矢追(法主) スサノオやね。》(林記)

④ 三類強敵

サバコノチカ

仏語。法華經の修行者に対して敵意を抱く三種の強敵。法華經勸持品に説かれる。

俗衆増上慢(邪悪な俗人)・道門増上慢(邪智の出家僧)・檀聖増上慢(聖人を装った出家僧)の三つ。

日蓮は幕府の役人、真言宗と浄土宗の僧徒、禅宗と律宗の僧徒の三を取り上げ、この三者が彼に迫害をくわえるのは、正しく自分が法華經の行者であるあかしだと考えた。

⑤吾方罪障フキトリ (小学館『日本国語大辞典』による)

罪障 悪行のためにさとりを妨げること。

解脱を妨げる悪い行為。道を修しさとりにはいいるための妨げ。

○私の罪障を祓い。(東京書籍『広説佛教語大辞典』による)

⑥吾レ生力ヘ

「人は靈界から生まれ出てくる前に、その人に何かしらこの世ですべき使命を与えられて生まれてくる」と法主はよく言っておられた。同じ魂でも世に出てくる時代時代によって使命は違うものらしい。例えば法主に「法主さんは何代くらい前まで分かっておられますか?」とお尋ねした時、「九代前まで分かっている」とお話されたことがあった。法主も時代時代で使命も違っていたことだった。

ここでは法主の話はこれでおいておき本題に戻ると、スサノオ命も自ら言われているように、「悪魔に墜ちた時もあった」という。

初めてこの文章(原文)を目にしたとき(平成28年3月21日三人の会)これはどういう事かと疑問を持った瞬間、「ヨシツネ コレナリ」と感得したことがあった。私はこれは「義經(源)のこと」だと思った。

こんな経験から「生力へ」の意味は魂には転生というものがあって、現界のその時々大きな流れに合わせて、使命を変えて人間も生まれ変わってくるということを示しているのでは、と思う。(杉本記)

(現代語訳)

倭姫 「私、倭姫、身に余るお言葉をいただき、ありがとうございます。日々未熟な舞でこの場を汚しているにもかかわらず、今日の姫からのありがたいお言葉、厚く厚くお礼申し上げます。未熟な舞ではありますが、精いっぱい心を込めて妙法を唱えて神楽を舞いますので、しばらくの間お許し下さい」

「大倭、日高見国鶏の森は、日本の安泰のためご靈界の方々皆様が妙法を唱えておられる地でもあります。スメラミオヤ・奇稲田姫様、いつまでもご健在であられますように。題目。」

ああ、ありがたい、もったいなくも奇稲田姫様御自ら私の目の前で手を合わせられ、私と共に妙法を唱えておられます。皆々、姫のこのようなお氣持を推し量って題目を唱えなさい。一拝礼拍手

「未熟な神楽でしたが、終わらせていただきませす。ああおそれおおいことです。奇稲田姫様、どうぞその合掌されているお手をおおろし下さい」奇稲田姫 「私は奇稲田姫。倭姫よ、長時間ご苦労でした。お礼を申し上げます。倭姫よ、またお願ひしますよ」

倭姫は礼をされて、「未熟な神楽舞でしたが、お気に入って頂き、この上ない喜びで(両手をつけて)、嬉しさのあまり言葉にもなりません。どうかお許し下さい。これにて退席いたします。」

建速素戔嗚 「私はタケハヤスサノオの命である。靈界に通じている日本、その日本に生を受けた者達よ、真の妙法を唱えてくれい。今の日本は闇の状態である。妙法を邪魔する者どもが攻め寄せて日本を奪い取ろうとしている。しかし皆の者達よ、心配はいらない。この日本は数え切れないほどの上位の靈界人達が守っておられるありがたい国である。真の妙法を唱えて私の悪因縁を祓い、奇稲田姫のお役に立てる人間として現界に生まれ出るようにしてほしい。」

私も前の世で転生して人の世に出た時は、悪魔の心で生きてしまったこともあった。(皆の者達の)「正しい題目の力により、その時の悪しき因縁(枉罪)を清めてほしい。真の妙法を唱えることは、この日本を確かなものにしていくことである。よくよくこの真意を体得(納得)せよ。私も共に真の題目を唱えよう。ナムミヨウホウレンゲキョウ」

禊会についての提案です

コロナウイルスのためこの会も中断を余儀なくされました。

まだ再開の日ははっきりしてはいませんが、再開にあたっては、過去の禊会のあり方にとらわれることなく一つの提案をしたいと思ひます。

それは「信じる前に、考えてみたいこと」をテーマの軸として、先ず日聖法主の月次祭などの法話(約30分ほど)の録音を聞いているから、その法話の中の「考えてみたい」言葉を選び、話し合いの材料にしてみても如何でしょうか。

また法話から離れて、例えば参加された人の個人的な疑問や悩みを、包み隠さず話し合う場にもしたいです。(杉本)

寸 莎

第143回

中川 武伸さん
なかがわ たけのぶ

来るべくして来た

今回登場してもらうのは大倭印刷株式会社で働く中川武伸さんである。ある人から、今の倭印刷には欠かせない人材であると聞いて、ぜひ一度取材したいと思っていて、邑の中ですれ違って挨拶する時の中川さんの大きな明るい声は印象に残っていたが、ほとんど話しを交わしたことがなかった。まずは生い立ちから聞かせてもらうことにした。

中川さんは昭和50年4月3日に奈良市尼ヶ辻で生れた。「先祖は200年以上も前から奈良に住んでいた」というから生粋の奈良人である。父親の和夫さんは、実兄の野村律夫氏が奈良市尼ヶ辻で経営する文房具販売や電気修理の会社を手伝っていた、以前大倭の一部門であった倭商とも取引があったという。その上この伯父の野村氏は、「神がかり的



大倭印刷 三嶋祥五絵

なところがあった、法主さんとも交流があった」とのこと。ここで、「目に見えない流れがあった、ここにたどり着いたのかな」という中川さんの感想にも実感がこもる。

話しを生い立ちに戻すと、「自分は一人っ子で過保護に育ち、真面目でおとなしく、面白味のない子だった」とややネガティブな自己分析をする。「母親が教育ママで、小さい時から公文やそろばん、習字や学習塾と忙しかったので、小学校の時には朝早く登校して友達とドッチボールなどを楽しんだ」という子供らしい思い出もある。

都跡小学校から都跡中学に進み、中1の時に現在も実家のある五条畑に移った。「中学で通っていた学習塾が楽しくて、その塾の教師に憧れたのが自分の生き方の原点の一つになっている」といい、後のアルバイトや職業選択にもつながった。

高校は北大和高校に進学したが、「一種の反抗期で、通学はしたもののほとんど勉強はせず、アルバイトで回転寿司屋やコンビニで働いたり、ゲームセンターで遊んだり、何か霧の中にいるような時代だった」と当時をふり返る。

高校3年で進学を選択に直面した時、憧れていた塾の教師たちの姿が頭に浮かんで、「ああいう人たちのようになりたいので、関関同立以外の大学には行かない」と母親にも宣言して浪人生活を選んだ。浪人中の勉強で国語等の成績も上がり、関西大学の商学部合格する。

大学では、「授業は最低限しか出席しなかったが、テスト前に友達からノートを集めて準備し、いつも上位の成績だったから、要領のいいタイプだったと思う」と笑う。アルバイトでは家庭教師から始めて小中学生を対象に数学や理科を教える塾の教師の仕事をした。

卒業後もフリーターのような形で学習塾で働いた。「塾の仕事は好きだった。子供にとって家と学校以外第三の場として人間力を向上させ、結果として成績が上がっていくプロセスにかかわることは楽しかった。自分の努力が波及して人を変化させていく醍醐味を味わった」と語る。

2年後に、中学の時に尊敬して

た塾の教師がIT企業を立ち上げ、誘われて入社したが、あまりの激務で体調を崩し1年弱で退職した。その後も数年にわたって田原本の塾で働いたが、「家庭もあり、どうしても生活が不規則になるので」、「ハローワークで転職先を探した。

その中の一つが大倭印刷で、家からの距離が近いのと、面接してくれた中島武宣社長の「会社を変えて発展させていきたいので手伝ってほしい」という言葉にひかれて就職を決めたのだという。ちなみに、中川さんの名と中島社長の名が同じ「タケノブ」であったことも決断をあと押ししたようである。

入社して10年あまり、営業をはじめいろいろな仕事に取り組んできたが、「何か提案すると、それをきちんと受け止めてくれる環境があった、安心して仕事に打ち込めている」と前向きである。趣味は何かと聞くと、「たまにビリヤードをすることもあるけれど、あえて言えば仕事かな」とさらりと言う。「居心地がよくて、来るべくしてここに来たのかなと感じることもある」とさわやかに語る。今回は写真を大倭印刷に任せるところ、似顔絵になった。

睡眠不足と疲労は大の苦手、血液型はA型とのことである。

(聞き手 岸田哲)

あじさい日誌

4月15日 午後2時から大倭神宮で箭負祭が行われました。

この日は大倭瑞の森と言われる地が、法主様の父隆蔵氏の回心により大倭神宮として出発した101年目の記念日です。

4月19日 午後2時から大倭大

本宮拜殿で鈴月かあさんの帰幽20年祭が行われました。参列者は密接にならぬ程度に多めで、

平成7年秋の一泊文化行事から「鈴月かあさん」をメインにして短時間編集した録画を見せて

頂きました。登場した人達のうち、何と15名が故人でした。

4月23日 大倭大本宮月次祭。祭典後、昭和42年4月23日の法話をお聞きしました(本紙未掲載)。

この日の祭壇のお供えの由来が紹介されました。まず岡山県真庭市美甘の田中家(湯浅晴子さんのお里)からは、法主さんにより御霊鎮めされた「神倭加茂津日女命」がお社にお祀りされた記念日なのとのこと。次に有志から命日が近い昇ちゃん(中村昇二さん)のためにと。

4月30日 さらに4回目の命日当日には、昇ちゃんハウスで高橋良美さんが李草根さんと夕食会をしてくれました。

5月2日 午前9時から有志が大倭墓地の大掃除。なお、これ

を期に原則毎月1日曜日が墓地掃除の日とされました。

5月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で巨倭の会。

大倭安宿苑では(菅原園)

4月11日 プロジェクターを使用

してアニメ上映。5名の人数制限と換気で感染予防対策。(須加宮寮)

4月22日 須加宮寮単独防災避難訓練を行いました。

5月3日 施設周辺散歩。(長曾根寮)

4月8・12日(二・イ)桜は散っていました。厨房手作りの花見弁当や職員劇「花咲か爺さん」でお花見の会をしました。

4月18日(特養) 演歌をかけたから、タコ焼き器を使ったホットケーキやデザート作り。

あんない

*月次祭(大倭神宮) 6月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会 6月13日(日) 中止。6月は12月とともに大袈ぎの月です。各々の場所まで心掛けましょう。

*月次祭(大倭神宮) 6月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮) 6月23日(水) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。

(茂毛路園) 4月23日 定例懇談会。6名の参加者に、施設長からコロナの

ワクチン接種についてお話し。(八重垣園) 運動の機会を持って頂けた

め、昨年の6月から開始したラジオ体操も、皆様の生活の一部となっています。

大倭会通信

去る4月23日に大倭会幹事会が開かれ、今年度の行事や人事について協議しました。

今年度の行事に関しては、コロナ禍の現状を考慮し、文化行事と文化講演会に関しては延期せざるをえないという結論になりました。ただし状況によって可能な活動は行っていますので、よろしくお祈りいたします。

人事に関しては、川端会長から健康状態の理由による退任の申し出がありました。新しい役員・担当者の体制については、コロナ後の活動再開を見据えて次のように選出されました。

会長	岸田 哲	顧問	且田 容子
副会長	大倉ひろ枝・林 修三(祝会・文化行事)・山崎 正知	顧問	川端 一弘
会計	溝口富士男(文化行事)	顧問	桜井 節子
会計監査	柴地 暁子	顧問	杉本 順一(祝会)
幹事	青山 法義(広報)	顧問	中島 健
幹事	岸野 春子(広報)	顧問	湯浅 進
幹事	高橋 良美	顧問	湯浅 芳郎
幹事	竹内 靖		
幹事	藤田 啓子		
幹事	藤林 峯子		
幹事	松本 モト		
幹事	矢追 房子		
幹事	李 章 根(文化講演会)		

()内は、担当。名前は各五十音順。

大倭会へのお誘い

昭和59年(1984)年4月発足時における趣意書より

本会は「大倭紫陽花邑」の基である「扶けあい」の精神が大切であることを共に自覚し、「仲良き社会」の実現を願って行動する会であります。この趣旨に賛同される限り、宗教、思想、信条を超えて入会をよびかけます。「より良き社会」の実現を願って行動しようではありませんか。

年会費：1万円 郵便振替：01060-6-31705